

本と話題

白人中間層の怒りと不安

長い選挙戦の末、米大統領選のゴールが1週間後に迫りました。当初、泡沫扱いだったトランプが暴言のたびに支持を広げる「トランプ現象」。本選挙の結果にかかわらずアメリカの今と今後を考えさせます。

「地殻変動」

横江公美著『崩壊するアメリカ』(ヒジネス社・1400円)は、いま米国では、レーガンに代表される「カウボーイの国」から、オバマに象徴される、さまざまなマイノリティー(少数者)が共生する多様化社会への地殻変動が起きていると指摘します。

「トランプ現象」考える



2000年代前半まで75%を超えていた米国の白人率は55%に低下、子ども人口では白人はすでに少数で、その変化に対応できず「多数派の地位から追い落とされる危機感」に駆られる白人層がト

ランプを支持。彼らが「古き良き時代」と憧れるのは黒人差別が合法で女性差別もまかり通っていた1950年代であり、トランプへの熱狂は、多様化社会への移行過程で、線香

の光たどし。さらに、トランプの出現で共和党の根幹であったレーガンの思想(①小さな政府②キリスト教的価値に基づく社会政策③強大な軍事力)は終わりを迎えたと述べます。トランプはこの三つのもれにも同調しておらず、差別発言を除けば、格差の是正など意外にもトランプとサ

ンダースの政策は似ているというのです。レーガン政権のシンクタンクだったヘリテージ財団の上級研究員の経歴を持つ著者は、強大な軍事力で「世界の警察」としてふるまうレーガンの外交政策は米国内で消えつつあると認識すべきだと強調します。

「層間に労働で汗を流した者は、夜、生活のことで冷や汗を流すべきではない」というトランプの言葉が彼らを引き付け、中間層への減税、公共事業拡充、年金や高齢者医療保険の充実、海外移転企業の呼び戻しなどの政策が心をつかむ状況が浮かびます。

前掲書と同様、本書もトランプ現象の根底には経済的苦境に加え、白人の少数派転落への恐れがあると指摘します。「自由と平等」

を掲げ、人種差別を否定し移民を受け入れる国アメリカーその理想像が、白人中間層の深刻な不安と、自分たちが正當に報われていないという怒りに揺さぶられ、「白人優位主義の再来」を招きかねない反動を生んでいると述べます。

差別発言がかえって支持を広げるのには、ポリティカル・コレクティブ(政治的正しさ)を重視する「エリート」層への反感があることも指摘されています。

この点では、森本あんり著『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』(新潮選書・1300円)が、アメリカ史に繰り返される宗教的熱狂の中にある反エリート主義を描きだし考えさせられます。(西沢亨子)